



少年
小説

廣くわう

野や

の

火ひ

海

野

順

風



もう幾年か過去つた日の物語りである——

廣い原中の一軒家の、古びた柱に凭れて、たゞ獨り夕暮の
戸口に立つた辨次は、眼に一ばい涙をためて、遠い山の彼方
へ沈みかゝつた夕日を見るときもなしに凝と見つめてゐた。
辨次の足許から遠い山の裾まで、見ゆる限り擴がつてゐる草
原は、何日か降り初めた霜にたゞ一色に枯果て、此の間ま
で美しく咲亂れた花野の面影は、何處に見出す事もできな
かつた。

けれども、辨次はそんな事を悲しんでゐるのではない。今
の辨次の心は悲しみと憤りに燃立つてゐた。現在の自分の
身の上は、この世の中に獨りぼつちである事さへも忘れるほ
ど、悲憤の念ひに驅られてゐた。全く辨次は獨りぼつちであ
つた。一昨日まで辨次の唯一人の頼みであつた父は、今日は
空しい白骨となつて、素焼の小さな甕に收められたまゝ、名
ばかりの佛壇の中に置かれてゐるのであつた。辨次の眼にた
まつた悲しみの涙はこれであつた。

たつた一人の父の死を悲しむ暇もなく、辨次は父が遺して
行つた原中の一軒家から、無情な村人の爲めに逐はれやうと

してゐた。辨次の眼にたまつた憤りの涙はこれであつた。
が、これには種々な理由があつた。

辨次がまだ漸く五歳六歳の頃は、まだ母親も達者で、辨次
の一家は山裾の村に安らかに住んで居つた。

或る冬の夜であつた。どうした機みか突然辨次の家から
起つた火から、折柄烈しい風に煽られて村の大半は瞬く暇に
燒盡されてしまつた。其の爲に不幸にも辨次の家は村中の怨
みの的となつてしまつた。

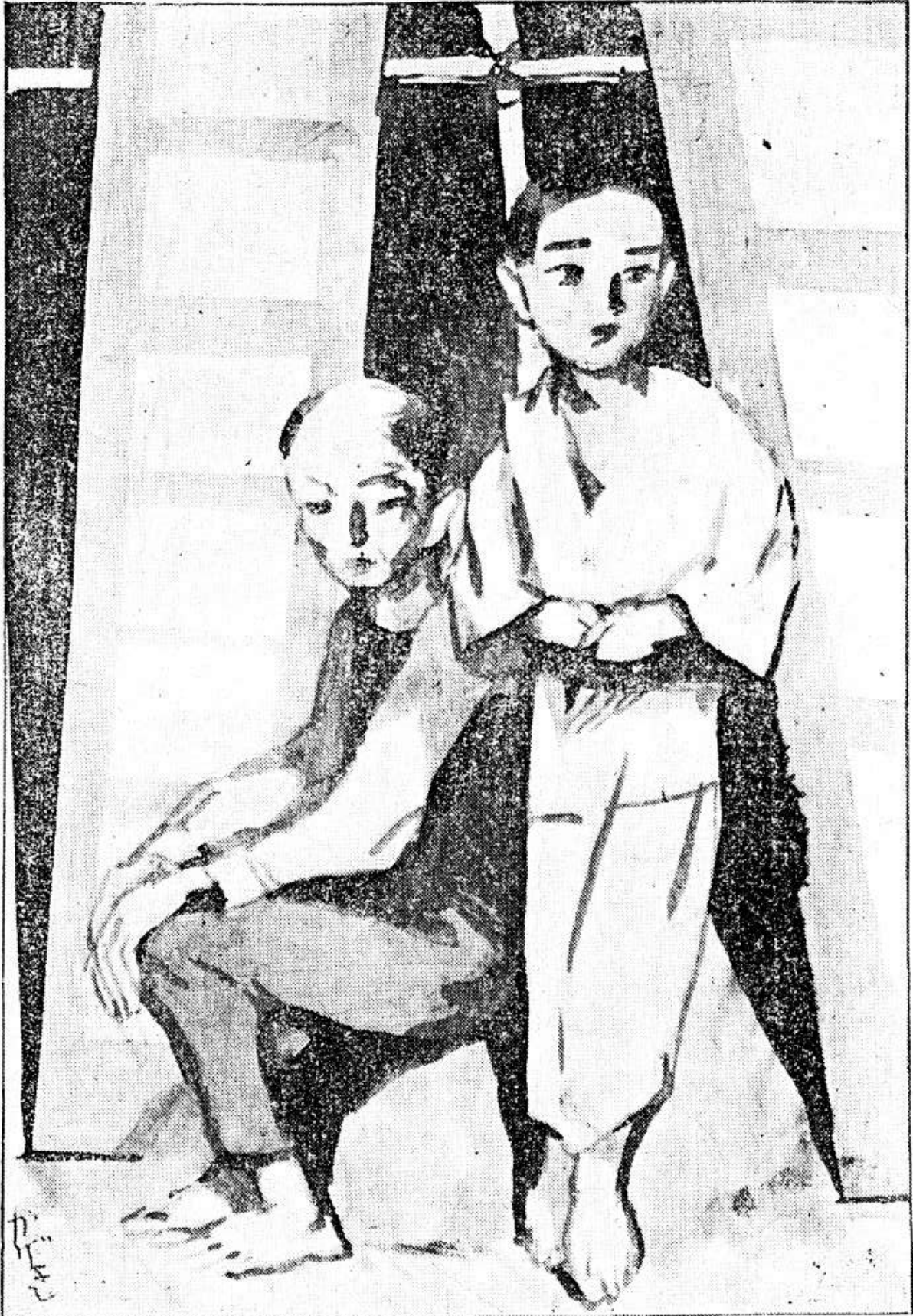
『あの家で火を出したばつかりに、俺の家は無くなつてしま
つた。』

『俺の家の老人は逃げる拍子に轉けて、片手を折つてしまつ
た。』

『俺の處の婆さんは、火事から病氣で死んだからには、あそ
この家は婆さんの爲には仇敵も同様だ。』

こんなにまで辨次の一家は憎まれてゐたが、とう／＼村中
の相談で、この一家はその後二十年間村から三十町以内の土
地に住む事が許されなくなつて、それのみか、その後辨次の
父親の働いて得た金は一家の要用以外、悉皆村へ納めてしま
はねばならない事になつた。

—か動を處共そもでま時何は次辨たつ立に口戸とるゝかれ暮—



—たれくに涙して返る思を事の日のたつき去過いだずせはとう—

『これも仕方がない。悪氣で出した火ではないし、運だと諦めやう。』と、父親は潔く村人の勝手に決めた命令に従つた。もとより辨次の一家とて火事の跡には下駄一足残つたものはない。やうやく、村から一里ばかりも離れた住む人もない。廣野の真中に、堀立小舎同様の住居を建てゝる爲に、父親は死ぬほどの苦心をした。

先づ住居は出来上つても、さしあたり今後一家の生活を支へて行く手段に、父親はまた心を悩まされねばならなかつた。淋しい原中の一軒家だけに、幸ひ日當りだけはよかつた。朝から晩まで家の周囲には日南があつた。それに家の後には澄んだ流れがあつたので、父親はその日當りのいゝのと水の豊かな川から思ひついて、紙漉の業を思立つた。

かうして辛くも親子三人は生きてゆく事が出来た。そして一家の費用から少しでも剰餘の金が出れば、父は潔よくその金を村へ持つて行つた。然し何處までもこの一家を憎んでゐる村の人々は、町からの歸り途などに四五人づゝ押掛けて來て、父の手にある紙の賣上金などを残らず持つて行くやうな亂暴をして居た。

一家がこゝへ移つてから四年目、ふとした病氣から辨次の母親は亡なつてしまつた。村人は母親の遺骸を村の寺に葬る事さへ許さなかつた。然し親切な寺の和尚様は深くこれに同情して、村人にはそつと、寺の片隅へ葬らせて呉れた。『お寺の和尚様の御恩は忘れるな』と、辨次は父から幾度も聞かされた。

母が亡なつてからの辨次は、父親の唯一人の手助けであつた。裏の川水を汲込んだ水槽の中で父が漉上げる紙を、粗末な張板へ丁寧に張付けて干すのが辨次の仕事だつた。毎日常の周囲の日當りは辨次の小さな手で干した張板が幾枚も並べられた。それでも相變らず村の人々からは除け者になつて父子は毎日く一心に働いた。これが一昨日までの辨次の身の上だつた。

暮れかゝる戸口に立つた辨次は、何時までもそこを動かうとはせず、たゞ過去つた日の事を思ひ返して涙に暮れた。何時か夕日は山の彼方へ落ちて、原中の一軒家は山の方から暮れかゝつてきた。

一昨日の朝の事であつた。此頃中とかく氣分が勝れなかつた父は、漉溜た紙を車に載んで町の間屋へ收めに行つたが、



やがて顔色悪く戻つて来ると、
 『丁度問屋で祝事があつたものだから、
 無理に酒を呑まされたが、それがやつ
 ぱり悪かつた。』と言つて、床を取ると
 そのまゝ臥せつてしまつた。辨次にも
 父の様子は十分苦しうに見えた。
 と、其處へ折悪しく村の人が二三
 人の通りに金の催促しに押掛けて来た。
 『や、丁度あるなッ』と二人の男は、
 突然父の*

かげし

*材許に置いてあつた財布に手を掛けやうとした。その振舞が亂暴だつたので、父は矢庭に身を起して財布を渡すまいとした。
 『何をツ』と、直ぐにかなり激しい争ひが始まつた。他の人々も終ひに皆父に立向つたので、齒噛みをしてゐる辨次の前で

父は悲しくも打負かされてしまつた。父から無慘に財布を奪ふやうにして受取つた村人達は、勢に乗じて、去り際に土間にある紙漉槽を亂暴にも壊して行つてしまつた。

『奴、もう駄目だッ』

と、父は如何にも口惜さうに唇を震はせてゐたが、忽ち激しい頭痛に堪えかねて、再び倒れるやうに床の上に横たはつてしまつた。

『辨次、手拭を水で絞つて来てくれ、苦しい』

父は喘ぐやうに命じた。

直に冷たい水で手拭を絞つて来たのを辨次の手から受取ると、それを心持よささうに、衰へた額に當てゝゐたが、やがてまた父は、

『辨次居るか？』と、枕許に座つてゐる辨次を探しもとめるやうに、充血した两眼を見開いた。

『お父さん、苦しいですか』

と、辨次は思はず膝行寄つた。

『うん、……もう駄目だ……こんな處に何時までゐた處で村の人に苦しめられるばかりだ。辨次……出奔しろッ。こゝばかりが家ではないぞ。……出奔しろッ……俺は駄目だつた』
愕いて父の手を握つた辨次に、かう囁言のやうにいふと、

そのまゝ父は死人のやうな深い眠りに落て行つてしまつた。そして暫くして辨次が氣付いて喚起した時には、父はもういつか息を引きとつてゐた。

父の死を知つた辨次は、あまりの事に涙さへ出なかつた。暫くは氣を失つた人のやうに腕を組んだまゝ、此の世を去つた父の枕許に座つてゐたが、やがておひくくに我に返ると、初めて熱い涙が辨次の兩眼に溢れて來た。身が消えるばかり悲しみの念ひが湧いて來た。村人も憎かつた。十年といふ長い間、貴い父を苦しめ通した村人が、身震ふばかりに憎かつた。けれども、遺憾となつた父の傍で何時まで悲憤に泣いてはゐられなかつた。さう氣が付いた辨次は、母の亡つた時、冷酷な村人の中でたつた一人の同情者だつた、お寺の和尚様を思出して、涙に濡れた顔を拭ひもあへず、お寺を指して願付けて行つた。

やはり和尚様は親切だつた。老眼に涙をためて、心から辨次の父の死を悲しんで呉れた。

『尤もぢや、尤もぢや。さぞ悲しからふ、けれどもお前がしつかりせにやどうもならぬ。それが親御へ孝行の一番ぢや』
とまで親切に言つて呉れた。和尚様の手で父の遺骸はその夜明頃、寺の裏山にある茶毘所で火葬にされた。

父の骨をいれた白い素焼の甕を抱いた時、辨次には、再び身を千切られるやうな悲しみが湧いて来た。

『悲しからうがこれも世の中ぢや、では、この骨甕を家へ持つて歸つて、せめて今日一日お線香などあげて、お父さんを慰めてやりなされ。そして日が暮れたら、また甕を抱つて俺の處へ來なさい。大切に葬つて進ぜやう』と、和尚様は辨次の頭を撫でながら言つて下さつた。辨次には和尚様の親切が涙の出るほど骨身にしみた。

その歸途だつた。村端れで村人の一人に逢ふと、その人は祿々父の死の弔詞も言はないうちに、

『いゝか、お前の親父が一生働いても、いつかの火事で村を焼いて、かけた損害が拂へなかつたら、死んだらあの家を残らず村へよこす事になつてゐたのだ。だから早速あの家は村の物になるのだ。お前はあの家にはゐられないのだから、その積りでゐろ』と人もなげに言ひ渡した。

『……………』
辨次は腹の底から煮返るばかりの憤怒の念ひを、凝と唇を噛みしめて押へながら、冷たい父の骨甕を抱きしめて淋しい我家に歸つて來た。

—三—

辨次は一昨日からの、死ぬほどの悲しい念ひや憤りを思ひ返しながら、なほも暮れかゝる戸口を離れなかつた。

『これから、どうしたら好いだらう』と我知らずに呟いて、今朝、村端れで逢つた憎い人の言葉を繰返して見た。

『今までもあの通りに無情な奴等の事だから、一度あゝ言つたからには、命にかけてもこの家を奪はずには措くまい。この家は父が苦心慘憺して建てた家だ。そうして母の死んだ家だ、また父の死んだ家だ、そうしてその父が遺していつた俺の大切な家だ。無慘くあんな奴等に奪はれてなるものか、……然し彼奴等の事だ、奪はずには措くまい。あゝ俺はどうしたらいいのだらう』
かう彼の頭は亂れに亂れた。と、ふと辨次の頭に臨終の父の言葉が閃めいた。

『さうだ。出奔！ それから……さうだッ』
と吐捨てるやうに獨語ちた辨次は、俄に活々とした顔にかへると、眞暗になつた家の中へ飛込んで行つたが、直に父の骨甕を抱へて戸口に現れると、股鬼のやうに寺を指して驅出して行つた。

寺では和尚様が、すぐ法衣姿に着換て、懐しい母の埋められた處へ同じやうに父の骨甕を收めると、懇に手厚くお經を讀んで呉れた。それから辨次は和尚様に連れられて寺の中へ入つて行つたが、何事か和尚と話があつたらしく、やゝ暫くしてから、再びその姿を寺の門前へ現した。

寺を出た辨次は、もう夜も更けて寢静まつてゐる村を通りながら、何か心に期した事があるらしく、意氣容々と、『散々俺たちを苦しめた奴等！ 今に見ろ！』といふ様な、誇らしげな顔付きで家に歸つて行つた。

四

静かなその冬の夜も更けきつて、やうやく曉近くならうといふ頃だつた。村を離れた廣野の真中に、暗闇を衝いて一團の火が燃上つた。

真夜中の眼りを愕かして打叩く半鐘の音に、飛起きて闖出した村人の眼に、廣野の火はもう大きな焰となつて物凄く映つた。

『やッ、辨次の家だッ！』

『さうだ、辨次の家だッ！』

村の人々は、非常に怖ろしいものでも見るやうに聲を震

はして起騒いだ。

お寺の和尚様も、この火を廣野を一目に見渡す山門の處から眺めてゐた。

『や、小僧やつたな。ふむ、……何かしらやるぢやらうとは思つとつたが、……ふむ』といふ言葉が和尚様の唇から、微に嘆息のやうに洩れた。

村の人々が狼狽して廣野を駈付けて行つた時には、原中の一軒家はすでに燒盡して、残りの焰が蛇の舌のやうに氣味悪く燒土の上を舐めてゐるのみだつた。

家も無い、紙漉槽も無い、張板もない、戸口の柱もとより無い。一切合切が無くなつてしまつてゐた。且つて母親の骨甕を供へ、また父親の骨甕を收めた小さな佛壇はどうなつてしまつたらう。それよりも、悲い少年辨次は何處に居るのだらう。廣野の一軒家を燒盡して、早も細り行く焰の薄明りに、何處を探ねても辨次の小さな頑しい姿は見出せなかつた。

村人はぼんやりと燒跡に立つより仕方がなかつた。再び平和な朝が明けた。

朝になつたが、村の人々が當にしてゐた辨次の姿はやはり何處にも見えなかつた。燒残つた灰燼の中を掘返して見ても、辨次の骨らしいものすら遂に見當らなかつた。(終)